

暮らしと健康の月刊誌

ケア

8 2015
August



特集

- 大腸がん ●湿潤療法
- 訪問！リハビリテーション室
- 気になる“もものせれ” ●吐音

山口大臣がIT活用推進の一環で 医療・介護・生活支援ソフト等を視察

高橋病院

高橋病院（函館市）では、在宅高齢者の生活を支援する患者・家族参加型生活支援システムや医療・介護・生活支援統合ソフトなどITを活用した最先端のシステム、サービスの開発に取り組んでいる。こうした取り組みが地域活性化につながる先端的事例となっていることから、山口俊一情報通信技術（IT）政策担当大臣ら一行が、地方創生IT活用推進会議・地方視察の一環として、同病院を訪問した。

視察を行ったのは山口大臣のほか、内閣官房IT総合戦略室、まち・ひと・しごと創生本部事務局、総務省、経済産業省局長、函館市役所、中島秀之公立はこだて未来大学学長ほか総勢20人で、同病院のほか、公立はこだて未来大学、東和電機製作所を視察した。

当日は高橋肇理事長が、これまで開発してきたシステムを紹介。「IDLink」は、インター

ネットVPNを活用し、患者さんの診療情報を医療機関同士で共有、良質な医療提供を目指すクラウド型サービスで、すでに全国39都道府県、4300施設で活用。北海道大学医学部付属病院ともネットワーク化され、函館市民が札幌の病院で肝臓移植を行った場合、これまでは毎月通院していたが、情報共有が可能となったことから3か月に1回の通院頻度となり、患者さんの身体的・精神的・経済的負担を減少させることのできた好例として紹介した。一方、ネットワーク構築で、医療者間の電子カルテ情報の共有が主で、患者さんからの情報発信がなく、圏域をまたいだ連携時の費用負担、アクセス権の設定、連携による質向上のための指標がないなどの問題点も提起した。

また、患者・家族参加型生活支援システム「どこでもMyLife」について、多職種間でスマートフォンやデジタルペンを使って在宅高齢者のADL・IADLを共有し、生活不活発病の迅速な発見、適切なリハビリの導入につなげ、患者さんや家族も評価できる簡易化、可視化した特徴を紹介。さらに、地域包括ケアシステムを



デジタルペンを使って記入する山口大臣



取り組みを説明する高橋理事長(手前)と山口大臣(中央)

基盤として、本人の情報発信内容を担当スタッフがリアルタイムで確認し、迅速なサポートに結びつける医療・介護・生活支援統合ソフト「ばるな」の運用状況も報告

した。

地域の問題点として、生保受給世帯が多いことによるサービス費負担や、生活支援を含めたコーディネート不足、介護領域のガイドライン策

定が遅れていることなどを指摘し、地場民間企業やIT企業との協働、活用などの提案も行った。

同病院では利用者本人が発信できるシステム作りを重視しており、今後は自宅のテレビを活用した情報共有システムや、健診・医療・介護等の情報を包括する「生涯カルテ」を構築し、必要に応じて活用できるシステム作りを目指

す意向。山口大臣からは後日、今後の地域医療システムのあり方の手本であり、産学官と地方自治体が一体となり、推進する必要性をあらためて確認したとの礼状が届けられた。